

# 修理報告

## 絹本着色二面曼荼羅図

二幅

附 旧軸木

二本

文保元年二月益円の銘がある

指定年月日 昭和五十三年六月十五日

修理年度 昭和五十六・五十七年度継続

補助事業者 浄土寺（広島県尾道市）

修理施工者 藤岡新三

修理担当者 藤井勇

現図系両界曼荼羅の遺品は少なくないが、本図は軸木の内割面に記された墨書銘の文保元年（一一三一七）という年記によつて製作時期が知られ、鎌倉時代末期の仏画の基準作として重要な一本である。曼荼羅本体において伝統に則る表現が鮮麗に保存されているのみならず、描表装までほぼ全形を残し、八双金具（環）も当初のものと考えられ、懸曼荼羅としての原形を伝える点が貴重視される。

修理前は軸木が外れ、八双取付部が切れかかつて、掛幅として使

用し難い状態になっていた。今回総裏打紙を除いたところ、その下から当初のとは思われぬながら上巻絹と軸助け（支点）という表背の完成を示すものが現れ、総裏紙を貼増すだけの応急的な補強修理もかつて行われたことを知り得る。

画面の損傷は、横折れやその裂傷への進行、絹の継目などにおける欠失といった通例のもので、かなり危険な程度にあったが、幸い曼荼羅の図様を損うまでに到ったところは殆どなかった。描表装部分の損傷が著しいのは、物理的理由の他に、その地に塗り込めた緑青による絹地の焼けのせいもあろう。

古画の肌裏紙は修理時に取替えられていることが多いが、本図の場合は、肌裏紙の上に墨書が小さく散在するのが今回見出だされ（別掲）、それが製作当時の筆と見られること、また画面絹裏の一面に施された裏彩色とその上のやはり今回現れた墨書（別掲、金剛界描表装地部においては表からその一部が見えていた）がよく保存されていることから、肌裏はもとのままと見做される（ただし胎蔵界描表装天地だけは肌裏を打ち更えられている）。そこで今回の修理でもこの肌裏紙を生かして、打ち直しのみ行つたが、肌上げに際しては、裏打紙に付着してくる裏彩色を元の位置に戻すため、一度に上げてしまわず、紙の継目から各紙を部分的に上げては糊を施し伏せて行く方法がとられた。なお裏彩色は、図の諸部分を塗り分けるが、表の彩色に用いられた顔料に比し、いずれも同系色ながら発色が鈍く、異質と思われる。描表装の輪宝文には裏から箔を押し、更に丹を塗っており、曼荼羅内部の装身具や持物など表からの金泥塗部分も、裏はやはり丹を施している。

表装は、本来の描表装を生かすことを旨とした。左右の縁には、

本紙（描表装部分）の保護を目的に、平絹を覆輪の如く付したが、目立たぬ様に色は本紙の補絹部に合せ淡茶とし、必要最小限の幅に留めている。描表装の延長していた軸巻部分は、本紙保護の観点から、軸より上部に位置せしめ、軸巻用には描表装との調和を図って淡緑色の平絹を補った（金剛界は軸巻部のはじめを少々失っているが、残存部を地部に接続し、新補の軸巻部を地部へ延長し胎蔵界と縦の寸法を揃えた）。表装の原形を變ずる弊は認めねばならないが、保存を優先する方法をとったものであり、その結果、表装の天地が等量に近くなった形態は、他例に照しても不自然でないと判断される。環は座金を輪宝形とした金銅製であるが、傷みのため模造して取替え、原品は別置保存、また軸首は同じ輪宝文を木口面に線刻した金銅切軸を新調した。軸木もやはり新調のものを使用した。

なお画絹裏と肌裏紙の、願文や結縁者名など大量の墨書は、既知の軸木銘を補足する内容であるが、要点を幾つか拾うと、まず本図は本来この浄土寺のために、「長福寺本」を写して作られたものであり、軸木銘には「執筆益円」とのみで不明瞭であったものが、「図絵綵色」の語を冠され、「助筆合力」比丘・沙弥四名も付記されることよって、益円は主任たる絵仏師であることが明らかにになり、また製作時期については、軸木銘の文保元年二月四日は恐らく着手を示し、画絹裏書の文保二年正月が完成を示すものと解される。

〔画絹裏墨書〕

(1) 胎蔵界

①（中台八葉院、図版参照）

我覚本不生「出過」語言通「遠離於因縁」諸邊得解脱「知空等座

定」諸法本不生自性離」言説清淨無垢染」因□□□空」  
 六大無礙常瑜伽四種曼荼各不離」三密加持速疾顯重重帝網」名即  
 身法然具足薩般若心」教心王圖利團各具五智」無際置円鏡」力故」  
 実覺」智転有漏九識」得無漏五智成一仏」躰独一法身反成」立輪  
 法界塔婆放五」智光照十方界照有」□類自滅惑障」離三途苦至本  
 尊位」

（梵字）各尊種子、胎蔵五仏種子、金剛界五仏種子、五大種子、胎  
 蔵大日真言、文殊真言、道場觀真言、光明真言など

②（描表装・天）

□後園御調郡 尾  
 □後園御調郡 尾  
 園土寺團園羅 也

長福寺本写之  
 筆師益円八圖

助筆僧

觀留

泉園

了像

尊

尊

益円

美

禪

薄押之

大

曼

曼

大恩徳

女老

禪輕賤

綿依 縑素

速疾

不滅

不変

利益

無私

弟子等慎発願

備後尾道浦 浄土寺

(2) 金剛界

① (成身会左端から降三世会右端)

法界衆生 自滅惑障 自身煩惱惑障一時消滅 五色照十方界

当光衆生離苦得樂 本尊与我無二平等冥合一躰

② (供養会)

六大無礙常瑜伽 四種曼荼各不離

三密加持速疾頭 重重帝網名即身

法然具足薩般若 心教心王過刹塵

各具五智無際智 円鏡力故実覚智

歸命本覚心法身 常住妙法心蓮台

本来具足三身因 三十七尊住心城

普門塵数諸三昧 遠離因果法然具

無辺徳海本円満 還我頂礼心諸仏

我命献諸供具 門々諸塵皆実相

実相周遍法界海 法界即是諸妙供

八葉白蓮一時間 炳現礼字素光色

禅智俱入金剛縛 召入如来寂静智

② (供養会以外の八会)

(梵字) 金剛界五仏種子、胎藏五仏種子、四印会各尊種子(左右逆)、

五大種子、金剛界大日真言、胎藏大日真言、文殊真言、道場觀真

言、光明真言など

(3) (描表装・天)

大 日本国 浄寺本院

図 芻勤策 同心

持戒清浄 図 繪曼荼

匣心合掌 発大誓願

従今身 尽未来際

値遇 両部 聖衆

世持誦 三秘密教

及以顯密 聖教

□遍十方 闍通三世

闍酬仏祖 広大恩徳

□座 三□現前

□家□家 順縁逆縁

一色一香 恭敬供養

一時一念 随喜讚嘆

皆悉帰入 □円性定

□□ 一味果海

□□ 四劫不変

□□ 利益無窮

□□ 齋戒益円

助筆合力 □比丘□恵

□□ 比丘導恩

□□ 闍弥良恵

沙弥信尊

奉行 □比丘了胤

願文 草者良寿

御因絹 絵具結縁願 □尊基

以下者当寺□住僧名 久代禪□信如

闍通

覚乗 心源 □教 □同 □導生

□智 覚円 尊定 性□ 圃円

□秀 信□ 道興 覚裕 □□

□妙 智円 忍尊 浄秀 □智

念□ 尊闍 慈濟 洵照 照□

闍仏 行忍 □良教 □闍法

備後国御調郡尾道浦浄土寺

□本尊阇

因保□年 戊午正月 日

④ (描表装・地)

曼荼羅寺現

唯順房 聖

了心房 聖

教義房 心

行空房 □□

念聖房 □□

聖如房 □□

教親房 □□

□心 □□

□如 □□

当国当庄 □□

内郡外郡 □□

本朝阇土有 □□

男女老少 □□

〔肌裏紙墨書〕

(1)胎蔵界 (左右は裏から向って)

① (中台八葉院、大日如来右) 禅聖 如慶

② (同、觀音菩薩左) 意慶

③ (同、阿弥陀如来左) 道教

④ (同右) 生子

⑤ (同、文殊菩薩右) 法眼 了信

⑥ (同左) □夜刃女

⑦ (同) 常法

⑧ (同) 法蓮 生子

⑨ (金剛部院、金剛持菩薩右) 考忍

⑩ (同、持妙金剛菩薩左上) 正仏

⑪ (同、離戲論菩薩左下) 法阿弥陀仏

⑫ (除蓋障院、非發生菩薩左上) 良海心源

⑬ (外金剛部院、夜摩女下) 菟久女

⑭ (文様帯左中) 如仏定証教隆 信空 叡尊 了信頼能

(2) 金剛界

① (描表装・地、中)

兵衛三郎入道

平氏女

七世父母 六親眷属

法界衆生 平等利益

② (同、左)

正仏 法阿弥陀 □道祖石 道□

信阿弥陀 願智

照願志 □

得阿弥陀 得万

③ (同、左端)

照願 願阿弥陀仏

蓮阿弥陀仏 又熊 黒

匱次郎<sup>尺</sup> 迦 得正

南一 一音 教円 得万

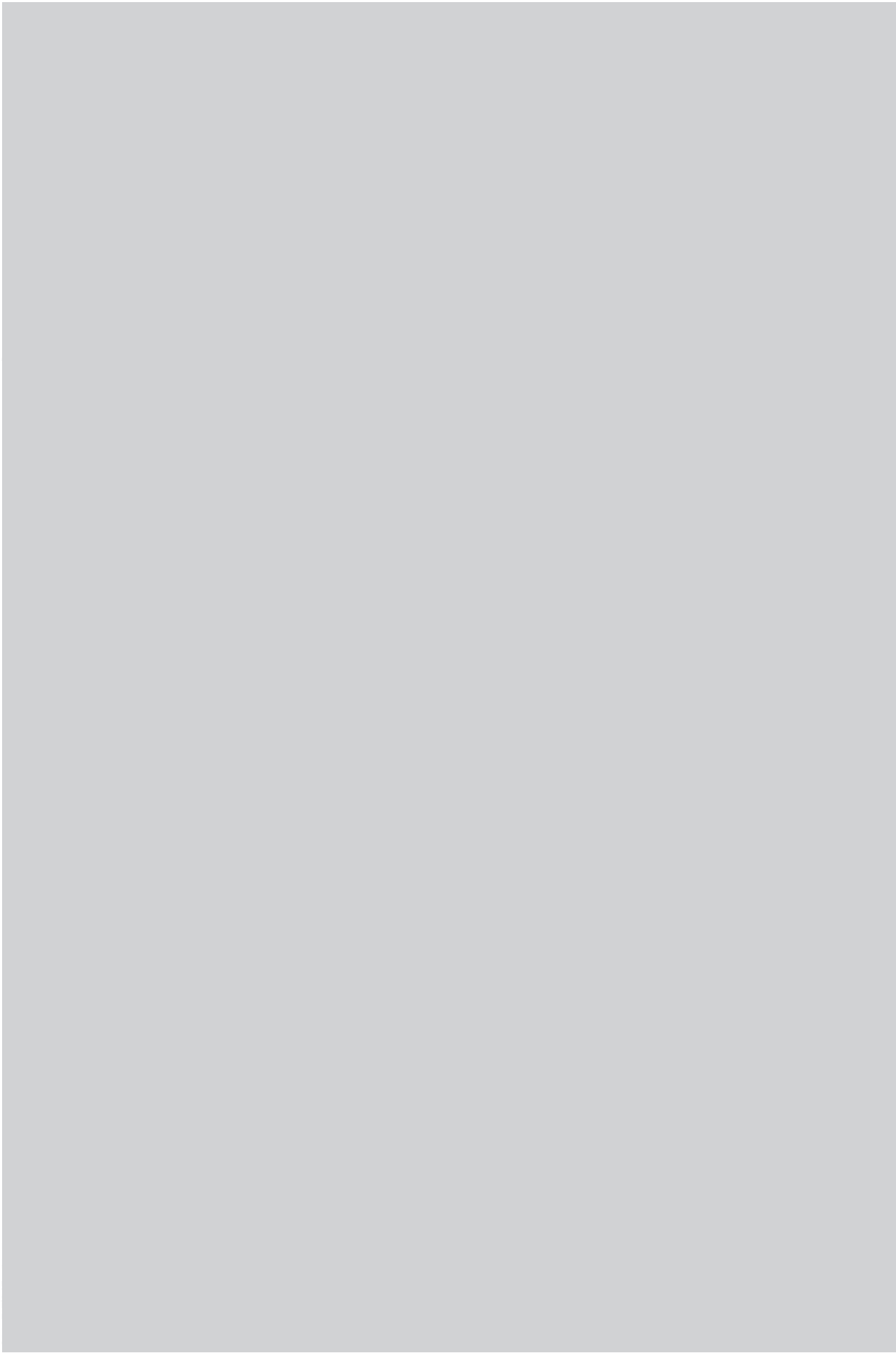
得一 得音 得行 教信

□生 大教 南音

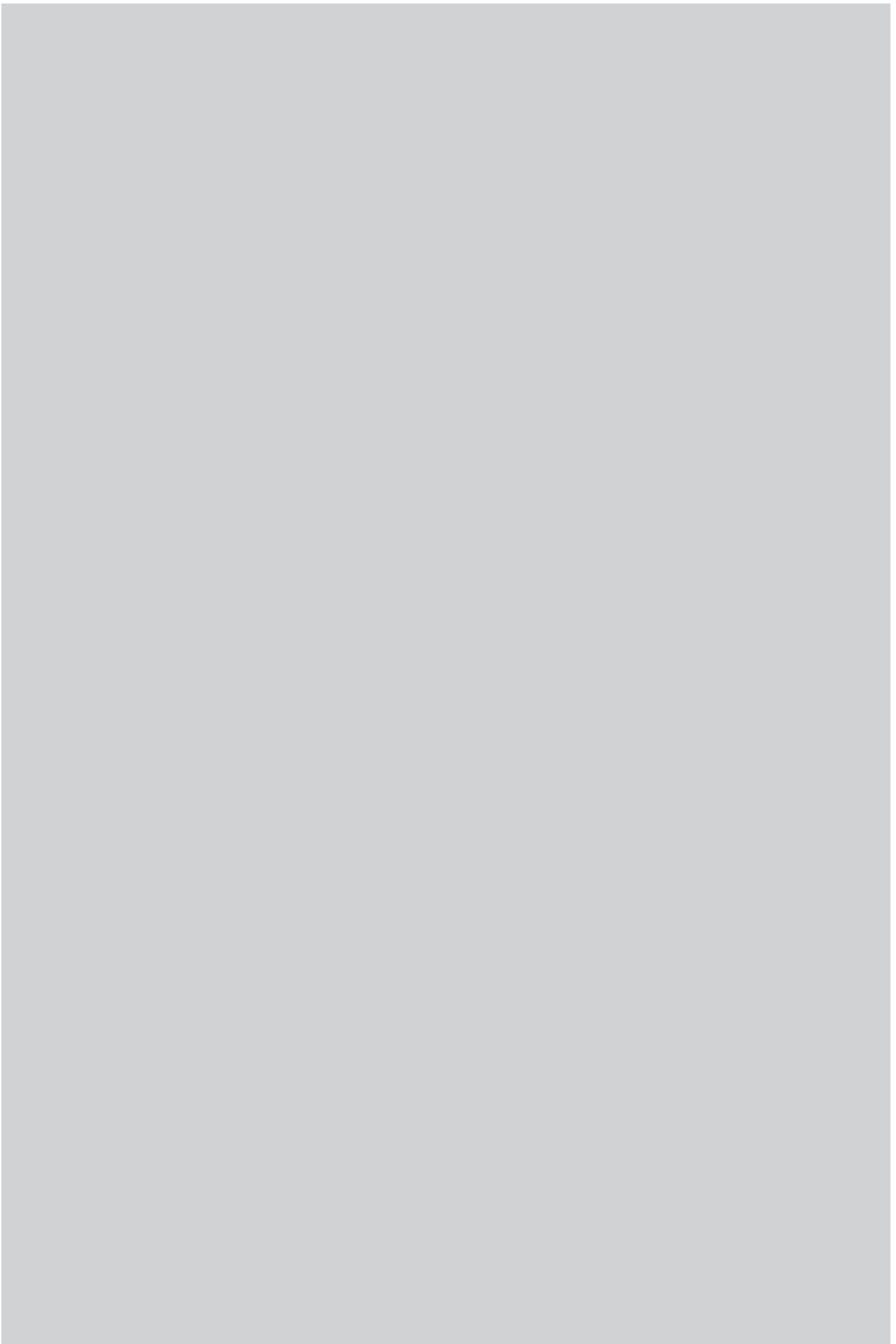
成仏 千与多 浄法

如来 尺迦法師 二郎

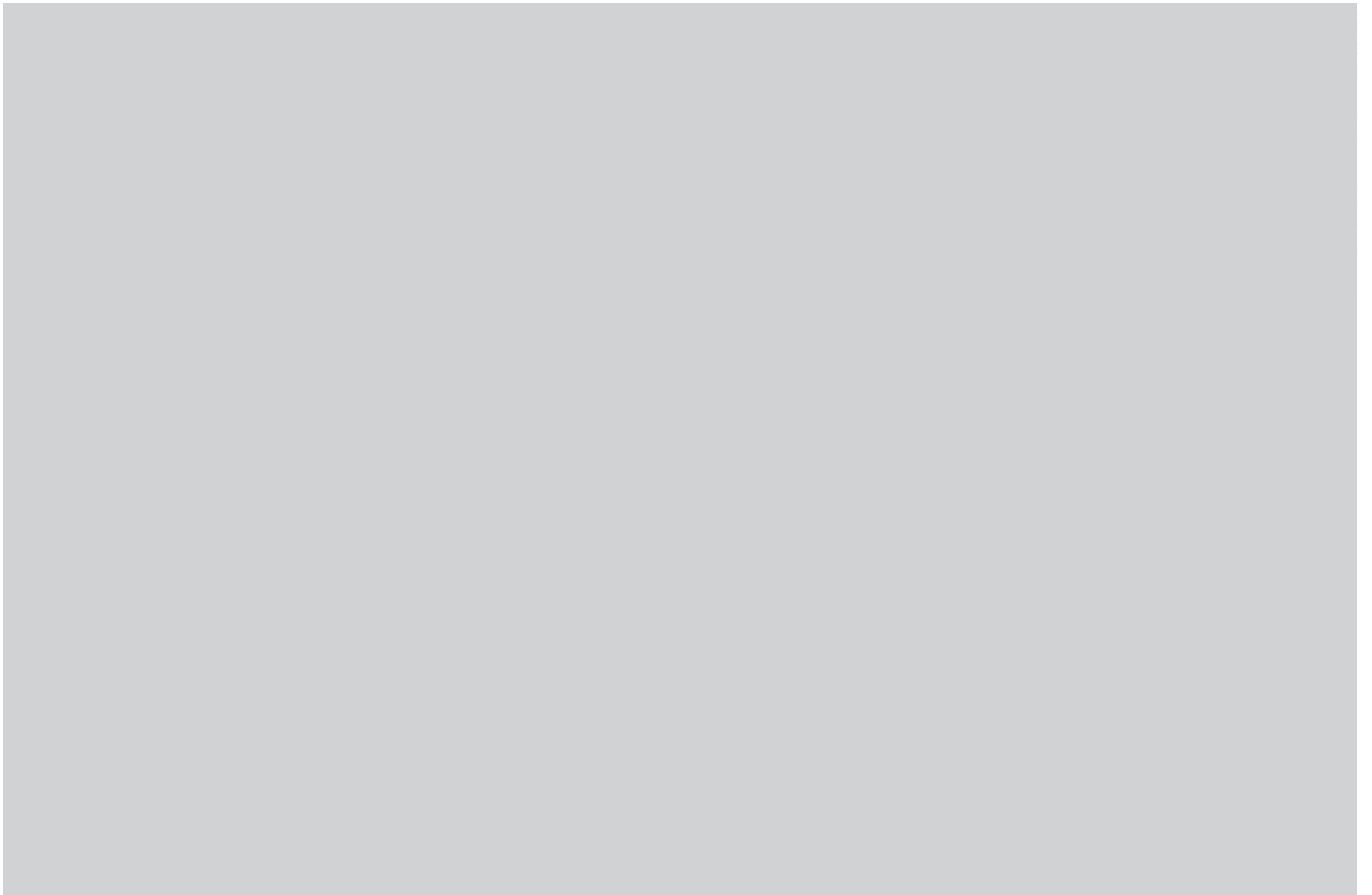
藤阿光影堂より写真等資料を提供いただいた。  
(執筆者 文化庁文化財保護部美術工芸課文化財調査官 中島博)



絹本著色兩界曼荼羅図（胎藏界） 広島 浄土寺



絹本著色両界曼荼羅図（金剛界） 広島 浄土寺

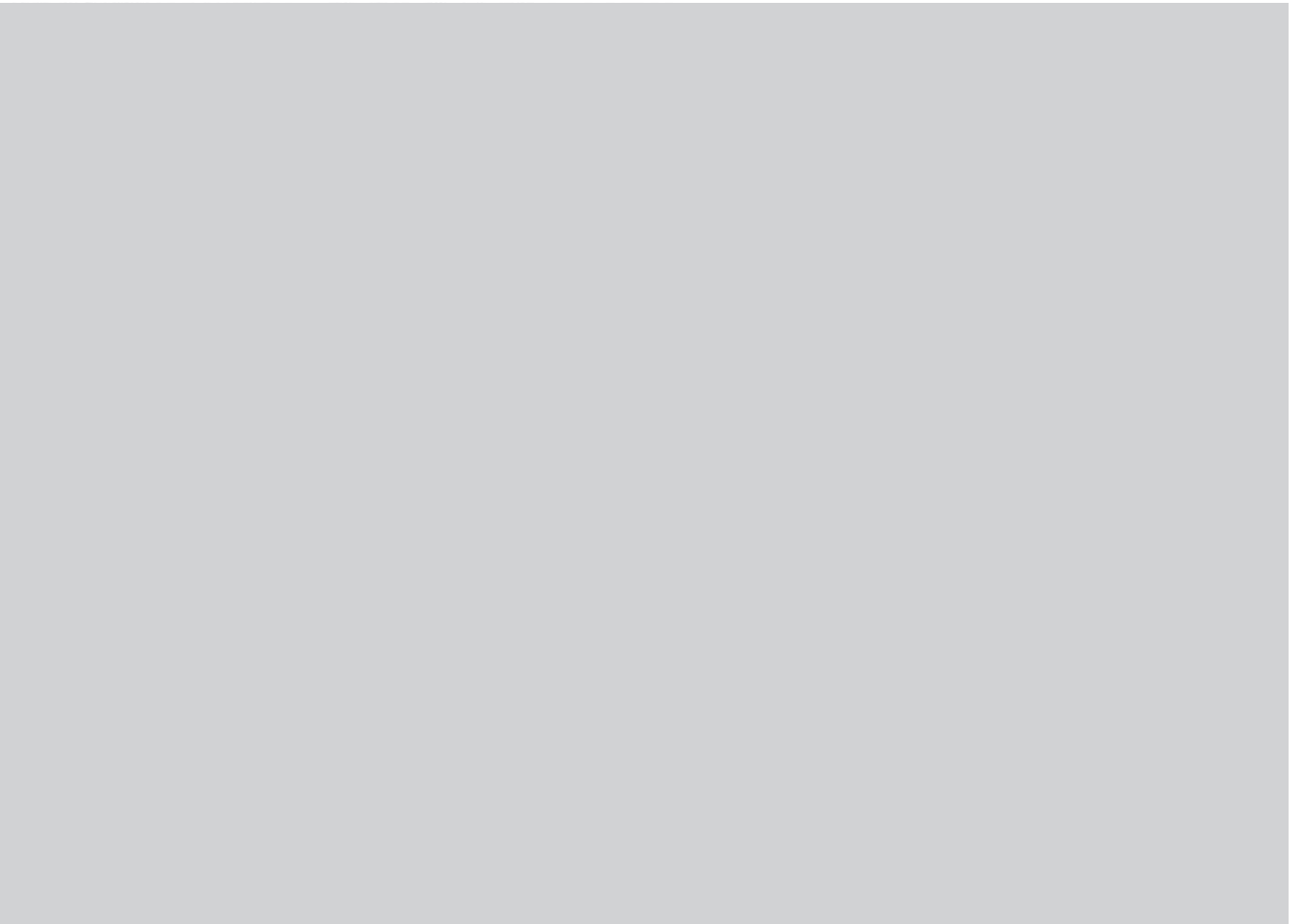


胎藏界 肌裏紙墨書（中台八葉院、文殊）



金剛界 肌裏紙墨書（描表装、地）





金剛界 画絹裏墨書（描表装、四印会）